介護新聞2009年5月21日

花凪屋繁盛記

連載26

人と人とがつながって

NPO法人在宅生活支援
サービスホーム花凪
木村美和子理事長

アッと驚くけんかの原因

五月一、二日の二日間「花凪屋三周年記念セール」を行いました。前日まで下宿人たちやミニデイサービス利用者が、スタッフ同様に頑張ってくれたおかげで何とか準備が整いました。

ホッと一息ついたところで、Aさんがこう言いました。

「あの人がいてくれたらね」

「あの人って、もしかしたらDさんのこと？」

「名前は忘れたけど、テーブルたたいてた人さぁ」

「やっぱりDさんだよ。よく働く人だったよね」

忘れもしない開店して間もなくの五月のある日、私の耳にAさんとDさんの言い争う声が聞こえてきました。何事かと思い、耳をそばだてると

「これは私の仕事だから、あんたはしなくて良いの」

「だれがそんなこと決めたのさ」

「そういうことになってるんだから、構わないで」

「わっち、聞くよ。聞いてくるよ」

「どーぞ。だれに聞いたって、これは私の仕事なんだからね」

どちらも退くことを知らず、言い争いは続きます。実は、仕事の取り合いをしていたのでした。いつもは仲の良いお二人がケンケンガクガクとやり合っている原因が仕事だったとは。

いつもは、口を挟まずに成り行きを静観するのが花凪流なのですが、こと仕事をしたいがための言い争いとなると話は違ってきます。

「フフフ…お二人さん。仕事は売るほどにありますから、心配しなくて結構でございます」

その後、お二人の競いは口から手に移ったのは言うまでもありません。それにしても素晴らしい人たちで、私にとって想像外の嬉しい出来事でもありました。

Dさんが骨折したら…

Dさんは二年前に足の骨折で、二カ月入院したことがありました。手術は無事終了しましたが、すっかり意気消沈して周囲に関心を示さなくなり、笑顔を見せることもなくなりました。リハビリも嫌がってベッドに寝ているだけになっていました。そんなDさんを見ているのはとてもつらくて、ある日後見人であるめいっ子さんに電話してこう言いました。

「Dさんは働くことが大好きなので、『花凪下宿』に戻って来て何かお手伝いをしてもらっていたら、元気になるような気がするのですけれど、どうでしょうか？」

「私も、面会に行くたびにつらくて木村さんに相談しようと思っていたんです」

二人の気持ちは合致で、めいっ子さんは翌日病院へ行って担当医とお話をして、翌々日にDさんは退院して「花凪下宿」に戻ってきました。

働く花凪家族。商品をきれいにし、相談しつつ値段付けしているところ。皆〝生き生き〟だ

下宿人たちやスタッフから、

「お帰りなさい」

「退院おめでとう」

の声を掛けられても、返答の声も出ず、かすかにうなずくだけ。車いすからいすに移乗の時には

「痛い！　痛い！」

と大きな声が出るので、必要なことに関しては発語で意思表示できるのだと安心しましたが、食事も自分で食べようとはせず、ただ座っているだけというのが退院当日のDさんでした。

仕事が特効薬

まだ刺激が強いかな？　とは思いましたが、翌日にはDさんを説得して「花凪屋」に連れ出しました。得意のタオル畳みをお願いしても、関心を示さずにただボーッと眺めているだけでした。

Aさんが「あんたしないんなら、わっち全部するよ」

と、話し掛けても反応なし。きっとAさんも張り合いがなかったのでしょう、いつもより畳む手先に弾みが感じられませんでした。

それでも、収穫はありました。コップに入れて出した麦茶を、両手で抱えてご自分で飲んでくれたのです。心の中で「飲んだ！　飲んだ！　飲んだ！」と、節を付けて歌ってしまうくらい嬉しかったです。

その翌日も、Dさんを「花凪屋」に誘いました。この日はすんなりと了解でした。この日も、タオル畳みをお願いしました。タオルを一枚手渡すと、それを伸ばしたり手の中で丸めたりしていましたが、そのうちにタオルをテーブルの上に乗せて畳み始めました。角かどを合わせることはできませんでしたが、それでも畳むことができたのです。

「Dさん、退院後の初仕事大成功ですね」

喜ぶ私。

「こんなのじゃダメだ」

ぶぜんとして言い放つDさん。

あれ、あれ、返事までしてくれたわ。良かった！　良かった！　良かった！

その後のDさんがどうなったかは、次回で。